

「(プログラム名称を記入) 参加報告書」

京都大学文学部・研究科3年 (氏名) 守谷克文

私は2014年1月14日～21日の8日間、マニラへ研修に行きました。先のボランティアの成果報告も含めた、結婚移民問題に関する視察を主な目的とした研修で、それ以外にも貧困集落やADB(アジア開発銀行)にも訪問しました。

マニラではほぼ毎日、CFO(在外フィリピン人委員会)へ赴き、日本へ渡航予定のフィリピン人に日本についてのプレゼンをしたのですが、その中での彼らとの交流などを通して、さまざまなものを見聞きすることができました。まず、渡航者に女性が圧倒的に多いというのが印象に残りました。中には日本に何度も行ったことがあり、日本語の上手い方がいて驚きました。しかしそれ以上に驚いたのは、彼女たちの多くが日本に渡ったあとのビジョンをほとんど持っていないということでした。なぜそうなのかは彼女たちの話からは判然としませんが、彼女らの楽観的な性格というよりは「どうい状況であろうが日本に行けば今よりマシ」というような考えが根底にある結果なのではないかと私は考えました。私がそう考えるようになったのは、フィリピンの格差、不健全な雇用を目の当たりにしたからです。

フィリピンは、見るからに雇用が不足していました。路上では飲み物などを売り歩く人や車を洗浄しようとする人で溢れており、仕事にできることはなんでもやってみよう、という想いが見えました。また、私たちが宿泊したホテルでも、従業員のほとんどはOJTと呼ばれる職業訓練生で、彼らは自らお金を払ってそこで働いていました。またホテルのマッサージサービスにおいてもマッサージ師本人の手取りの割合は驚く程低く、搾取の構造が伺えました。経済の未発達、雇用制度の整備不足など、さまざまな理由が考えられましたが、いずれにしてもフィリピンで生活資金を稼ぐのが難しい人がいることは明白でした。そういった状況から見れば、アルバイトなどの雇用形態が当たり前に見られ、さまざまな雇用が溢れている日本は、どうやってもフィリピンよりはお金を稼げる場所なのでしょう。

そして、そういったフィリピンの不健全な経済状態を最も肌身に感じたのが、ストリートチルドレンの生活するコミュニティでした。彼らは橋の下のお世辞にも衛生的と言えない場所に住んでいましたが、そのすぐ近くには大きなビルや高級ホテルが建っていました。明らかに矛盾した状況でしたが、ストリートチルドレンの彼らは屈託ない笑顔で本当に幸せそうにしていたので、これが問題あることなのかどうかわからなくなってしまいました。しかし、やはり不健全だと感じたのは、一般的な生活を送っている人たちが彼らの現状を理解しようとしていなかったからです。後日訪れたフィリピン大学で、それを強く感じました。

フィリピン大学では、ヨネノ教授が受け持つ院生の授業を見学させていただいたあと、その学生とフランクな会話をしました。彼らは日本の政治を勉強している学生ということもあってか、日本のサブカルチャーに深く興味を持っていました。草食系男子や腐女子、仮装彼女などについて改めて聞かれると、わからないことが意外と多いことに気づかされました。そんな年齢も感性も私たちと近い彼らも、ストリートチルドレンのコミュニティに行っことがないと言っていました。搾取する上位層はもちろんのこと、中間層もすぐ隣にある下層をほとんど認識しないように生きているというのが私の率直な感想です。ADBやソーシャルワーカーのもとを訪れて、こうした最下層を救う取り組みが行われていることに非常に感動し、興味をもちましたが、私が今回フィリピンで最も強く感じたのは、フィリピンで普通の生活を送る人々がそうした矛盾や格差を正しく認識し、疑問を感じるようにならなければ不健全な経済状態は解消されないのではないかとということです。

結局、今回のメインテーマである移民が抱えるさまざまな問題も、そもそもはこの不健全な経済状態によって移民が増加せざるを得ないことがひとつの根底にあることを考えると、人々が自分の社会の美しくない部分に目を向けることはあらゆる問題の解決にむすびつくような気がしてなりません。次回、機会があるならこうしたところや雇用問題について、よりくわしく調べてみたいです。